

**令和元年度 研究拠点形成事業(A. 先端拠点形成型)**  
**中間評価資料(進捗状況報告書)**

## 1. 概要

<b>研究交流課題名 (和文)</b>	テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築		
<b>日本側拠点機関名</b>	名古屋大学		
<b>コーディネーター 所属部局・職名・氏名</b>	高等研究院・客員教授・阿部泰郎		
<b>相手国側</b>	<b>国名</b>	<b>拠点機関名</b>	<b>コーディネーター所属部局・職名・氏名</b>
	アメリカ	コロンビア大学	Faculty of East Asia, Professor, Haruo SHIRANE
	フランス	コレージュ・ド・フランス	Institute of Advanced Japanese Studies, Professor, Jean Noel ROBERT
	ドイツ	ベルリン自由大学	Faculty of History, Professor, Jochem KAHL

## 2. 研究交流目標

申請時に計画した目標と現時点における達成度について記入してください。

## ○申請時の研究交流目標

○人類が創出した文化の所産は、その普遍的価値を等しく認められ、尊重されるべき共通の遺産だが、その頂きに立つ宗教の生み出し、その象徴となる遺産は、過去にも、とりわけ現在の世界の状況において、深刻な危機に瀕している。多様性を認め、異質な文化と共生することを理想とする社会にあって、人文学が果たすべき責務のひとつに、人類の宗教文化の遺産についての普遍的な意義を、その情報を含め、諸研究機関の連携による分野間の学知の総合によって見出し、提言する学術創成が求められる。そのための総合的な研究の蓄積と理念において領導する欧米の中核拠点大学との、国際共同研究が必要とされている。

○世界各国の文化機関（博物館・美術館・大学・図書館等）所蔵分を含めて、各地に伝えられる宗教が生み出した文化遺産に対する総合的なテキスト学による探査と研究を推進する先端的国際研究拠点を、名古屋大学人文学研究科の「人類文化遺産テキスト学研究センター(CHT)」に構築する。このCHTでは、日本／アジアの宗教文化遺産のアーカイヴス化と探査で挙げた大きな成果を、まずコロンビア大学、コレージュ・ド・フランス、ベルリン自由大学との成果の共有を通じて連携し、中堅・若手研究者の相互交流による広域な大学間および文化機関間の研究集会や国際ワークショップ開催による“宗教文化遺産テキスト学”研究コンソーシアムの活動を立ち上げる。

○この国際学術連携を通じて、5年間で、日本を中心に（アジア／ヨーロッパ／中東等を包摂した）世界的な宗教テキスト文化遺産の普遍的価値の認識を共有し、そのアーカイヴス化を通じた情報共有と、人文学における宗教テキスト研究が有する画期的な学術上の発展可能性を、最先端の国際共同研究の成果発信によって提起する。

## ○目標に対する達成度とその理由

上記目標に対する2カ年分の計画について、

■十分に達成された

□概ね達成された

□ある程度達成された

□ほとんど達成されなかった

【理由】

相手側の研究拠点である米コロンビア大学と仏コレージュ・ド・フランスとは、それぞれ交流開始の当初から共同研究を立ち上げ（R-1「境界と越境のテキスト文化遺産」R-2「宗教文化遺産としての論議と宗論テキスト」）、また、米の協力機関であるハーバード大学とも共同研究（R-3「像内納入宗教文化遺産の比較研究」）を始めた。これら二年間の学術研究の成果は、何れも複数のセミナー開催を含めて順調に進行し、セミナーの成果およびセミナーのために用意された報告論文を始め、それらの宗教文化遺産という研究対象上の特質から、展覧会やその図録、また資料集や報告書など、多様な形態による媒体の制作を含む研究成果が提示できることになった。後半はそれらの成果が結実し、次々と刊行、発信されることになる。独ベルリン自由大学については中東エジプトの遺跡調査を対象に現地を中心とした研究連携を行うという独自の形態で交流を進めているが、その一環として2017年10月にベルリン自由大学が調査を行っているアシュート遺跡と名古屋大学で調査を行っているアコリス遺跡それぞれにおける研究成果を討議するコロキアムを名古屋大学で開催し、また、2018年10月には第三国（韓国）での文化遺産をめぐる国際学会を通じた研究交流が開始され、2019年6月にはベルリン自由大学において研究集会（S-4）が行われるなど多角的な研究交流が実現できている。

これら中心的な研究交流に関連して、上記以外にも、拠点と連携する各国の協力機関、多くの宗教文化遺産を巡る研究交流がセミナーとして実施され（オーストリア・科学アカデミー、ドイツ・ハンブルク大学、米カリフォルニア大学サンタバーバラ校、スイス・ヌーシャテル大学、フランス・エクスプロバンス大学など）二年目には飛躍的に名大を中心とするネットワークが拡大し、本事業の期す世界的な国際宗教文化遺産コンソーシアム設立の基盤を準備しつつある。更に、共同研究の成果発信も、EAJS リスボン大会での「西行」学会など活発に行われ、本拠点形成事業の存在を広く周知させた。

この交流では、若手研究者・大学院生を主体とするセミナーを特に設け、南山大学と共同で恒例の「日本宗教文化セミナー」として開催するなど、若手が参画する多様な機会を設けて、若手育成の促進をはかり、相手側拠点ははじめ各国から多数の参加者があったことも特筆される。

更に、本事業と同時並行して実施されている JSPS グローバル展開プログラムによって、米ハーバード大学、仏イナルコ、ストラズブール大学、独ハイデルベルク大学の研究者が日本の文学・美術研究者と国際共同研究を連携して行うことで大きな成果を挙げ、拠点間の連携を側面から支援することにより、研究交流の活性化と成果発信の可視化が相乗的に促進された。

### 3. これまでの研究交流活動の進捗状況

(1)これまで(平成31年3月末まで)の研究交流活動について、「共同研究」、「セミナー」及び「研究者交流」の交流の形態ごとに、派遣及び受入の概要を記入してください。※各年度における派遣及び受入実績については、「中間評価資料(経費関係調書)」に記入してください。

○共同研究

【概要】

名古屋大学 CHT の主導の許で、米拠点コロンビア大学(R-1「境界と越境のテキスト文化遺産」)と仏拠点コレージュ・ド・フランス(R-2「宗教文化遺産としての論議と宗論テキスト」)の二つの共同研究が初年度から開始され、それ

それぞれ相手国機関において大規模な学会をセミナーとして開催し、更に日本国内でも学会や講演会等が行われ、多数の報告者と参加者を得た。その成果は全体として 20 篇の編著書・論文、69 本の口頭報告という、当初の予想をはるかに上回る業績を得た。既に R-1 では全ての報告論文が相互に翻訳を加えて用意され、また R-2 では日本語版論文集の執筆編集段階にあり、資料集が作成されている(参考資料参照)。また、拠点協力機関であるハーバード大学との共同研究(R-3「像内納入宗教文化遺産の比較研究」)も、日米双方でのセミナーとワークショップを経て、二年間の成果は 2019 年 5 月のハーバード美術館における「聖徳太子二歳像」とその像内納入品の展覧会および公開セミナーに結実し、従来全く知られることのなかった東アジアの文化交流の遺産を明らかにする画期的な資料集として提供され(参考資料参照)、報告書が共同で作成されることになった。いずれの共同研究も、既に開催されたセミナーにおいて基礎的な研究成果を提出しており、以降は、更に広汎な分野からの討議検討の上で共著(共編)論文集や報告書の公刊が予定されている。

また、この過程では、独拠点協力機関であるハンブルク大学の国際写本研究所と新たな共同研究を開始することで合意し(R-4「宗教写本学による国際宗教文献遺産の創成」)、2 年度目のセミナーを経て 3 年度目から本格的な研究活動を展開することになる。これによって、上記の三つの共同研究と拠点間のコンソーシアム構築を、「宗教写本学」によって橋渡しし、ベルリン自由大学の遺跡・遺物を対象とする共同研究や、同じく協力機関であるハイデルベルク大学との聖性と物質性に関する研究とも結び付けることができよう。

米国、仏国でも、それぞれの拠点との共同研究を補完する協力機関との研究が進展しているが、これらはセミナーの項で説明する。

#### ○セミナー

	平成29年度	平成30年度
国内開催	1 回	4 回
海外開催	3 回	6 回
合計	4 回	10 回

#### 【概要】

初年度は 4 回のセミナーを開催したが、2 年度には倍以上の 10 回のセミナーを開催することができた。その中心となったのは、拠点との共同研究に関連して、その協力機関となった各研究機関やその研究者が、それぞれに特色ある宗教文化遺産を対象とした独自の課題を提案し、拠点研究者がそれに答えて共同研究の内実をより多様で広がりのあるものにするために企画されたセミナーである。それらは西欧の修道院と仏教寺院のアーカイブスの比較研究(ウィーン、H29 年度 S-1)であり、また「灌頂」という密教儀礼を通じて論義などの顕教儀礼が照らし出される研究(サンタバーバラ、H30 年度 S-1)であり、あるいは「正統と異端」という宗教上の大きな課題を焦点として論義・宗論の正統性を確立する役割が問い直される研究(ヌーシャテル・名古屋、H30 年度 S-9・S-10)であり、更に文化遺産の創成をめぐる地域や歴史的アイデンティティの自覚をうながす運動についての研究(ストラスブール、H30 年度、S-5)、宗教文化遺産の象徴ともなる<sup>アイドル</sup>神をめぐる境界論的研究(エクス・マルセイユ、H30 年度 S-6)を扱うなど、多彩ではあるが、全て世界と日本の宗教文化遺産が遺産として歴史的かつ社会的に在らしめられ、また創成、継承されるにあたって逢着し、提起されるべき重要な課題として、各拠点間の共同研究を支え、その議論の幅を広げるために不可欠なセミナーであった。これらのセミナーの為に遠方から参加された研究者や聴講した学生も多く、本事業と研究課題の存在を周知するためにも有益であった。

特に、初年度は EAJS(ヨーロッパ日本学協会)国際研究集会リスボン大会に臨み日本を代表する僧侶歌人西行を主題とするセミナー(リスボン、H29 年度 S-4)を開催し、拠点研究者を始め多数の参加を得たが、宗教・文化的境界の越境を体現する西行(とその歌、伝承文化)のような存在を宗教文化遺産としてテキスト学により対象化することを通じて、本事業の研究成果の一端を、効果的に国際学会の場を通じて発信し得た。この「西行」を主題とす

る学会は、更に 3 年度目にはエストニア、タリン大学において、やはり本事業のセミナーとしてエストニア側とジャパンファウンデーションの全面的な支援の許に開催される運びである。更に、西行と並ぶ学僧歌人であった慈円の学会が、共同研究の結実となるセミナーとして仏拠点コレージュ・ド・フランスにおいて 4 年度目に開催されることも決定している。

## ○研究者交流

### 【概要】

米・仏・独の各拠点からは、初年度、二年度ともに拠点コーディネーターが来日し、名古屋大学 CHT を訪れてセミナーや講演会を開催し、また研究交流のための打ち合わせを行っている（コロンビア大学、ハルオシラネ教授、17 年 6 月、18 年 8 月。コレージュ・ド・フランス J.N. ロベール教授、18 年 6 月、12 月。ベルリン自由大学、ヨヘム・カール教授、17 年 10 月他）。また、コロンビア大学のマイケル・コモ教授は、本事業の立ち上げに際して名古屋大学に三か月特任教授として研究滞在し、講演を行うと共に、台湾大学への共同調査ワークショップを共にした。また、ハーバード大学東アジア学部からは本事業に合せて大学院博士課程 1 名が長期研究滞在し、加えてセミナーのワークショップのために大学院生 4 名が来訪参加した。ストラズブル大学からはデルフィーヌ・ミュラール講師が短期訪問（18 年 10 月）し、更に、スイス、ヌーシャテル大学のダニエル・モレロ教授ほか 6 名がセミナー開催（19 年 3 月、S-10）のため名古屋大学を訪問した。

名古屋大学からは、本事業による相手側拠点への長期の研究滞在は行わなかったが、本事業に関連する研究交流と教育を通じた成果発信のため、JSPS 頭脳循環プログラムにより名古屋大学と青山学院大学の PD4 名が、協力機関であるストラズブル大学に長期派遣されており、そのうち二人が、本事業のセミナーやワークショップにおいて報告者をつとめている。

(2)(1)の研究交流活動を通じて、申請時の計画がどの程度進展したか、以下の観点から記入してください。

## ○日本側拠点機関及び相手国拠点機関の交流によってえられた、世界的水準の国際研究交流拠点となりうるような学術的価値の高い成果

人類の宗教文化をめぐる拠点間の各共同研究は、一方は「境界」という抽象的で人類学・文化論的な課題を設定し、人類文化のあらゆる位相を対象化することが可能な視点として、それを日本文化と中世についてとらえる方法とする。一方は「論義」という具体的な仏教の宗教テキストの領域を取りあげ、その歴史と文化の所産から普遍的属性を認識しようとする。両者は対照的な方向から、宗教文化遺産の諸位相を、それぞれテキストとして概念化し、またテキスト分析を用いて定位し、解明しようとする試みを企てた。この二方向からの、概念から具体へ、具体から概念への探求のベクトルにより、多様な宗教文化の所産は、その複雑な構造を、また、いかなる文化遺産も必ず負っている歴史文化の文脈(コンテキスト)が照らし出されることになろう。

研究代表者は、この課題に対して「境界」には「越境」という文化動態をあえて意識化するような問題設定を求め、その生成変化の相に注目するよう提案した。また「論義」については、「宗論」という宗派・宗教間の正統性や真正性が成立・形成される歴史・社会的契機を導入するよう提案し、いずれもその主題設定に反映された。こうして発足した二つの共同研究は、前述したように第三国での開催を含む、互いに関連する多くのセミナーによって、多角的な広がりをもって展開されることになった。

・R-1「境界と越境のテキスト文化遺産」では、米国と日本の各専門分野に属しながら、宗教文化に深い関心をもつ研究者が結集し、この問題提起の許で各自の先端研究を多元的なままに総(融)合を試みるセミナー「境界・芸能・神仏(コロンビア、H30 年度 S-8)で報告討議を行った。宗教と神仏の世界であった中世

日本について、文芸・美術と思想・民俗の諸領域を、テキストと間テキストの機能を夢や託宣などから再発見しつつ、境界を共通の課題とする諸報告がなされた。従来の学問分野の許で固定化された遺産あるいは作品の枠を超えた、それぞれに多元複合的世界を形成する宗教文化遺産の動態とその歴史的文脈が、あらたに見いだされることになった。その学術的成果の一端は、本共同研究の前提となる国文学研究資料館国際共同研究の電子ジャーナル『Japanese Literature and Culture』1, 2(2018, 2019)をご参照いただきたい。そのうえで、本セミナーで基調講演をつとめたベルナル・フォル教授の海・水界からの日本宗教像、ハルオ・シラネ教授の民衆語り物芸能説経「をぐり」の文化境界論、代表者による総括報告の中世形成期鎌倉における諸位相の境界の生成など、今後の新たな本格的な研究展開を方向付ける報告を提出することができた。

【ハーバード美術館蔵聖徳太子伝二歳像と像内納入宗教テキストの布置体系】



・R-2「宗教文化遺産としての論議と宗論テキスト」は、フランスの人文科学の伝統の上に立つ東洋学と仏教学の知の結集として20世紀初頭から編纂事業が継続されている仏教百科事典『法華義林』の革新的再構築を、日本の学术界が共同して促進させ、分散・多極化した世界の仏教・宗教研究の総合化を目指すために企てられた。宗教の形成と発展に不可欠な運動として、自らの真正性と正統性を獲得するプロセスとしての論争、また他者と対抗し自らの体系化をはかる学問儀礼であり、その組織の形成をはかり後継教育のために駆使される宗教言説であり、テキスト生成システムである論議・問答と宗論が、その対象である。仏側コーディネーター、ロベール教授の提唱する宗教言語の普遍性を追究する聖語論(制)Hieroglossiaにもとづき論議の多面的な機能とその普遍一般に共通するテキストの方法を明らかにすべく行われた(H29年度S-2)パリ学会と、論議を通じて日本仏教の宗派のみならず歴史文化の展開までが見渡されることになった京都・龍谷大学のセミナー(H30年度S-2)によって、この論題が人文科学において最も古く、かつ先端的な課題となることが明らかになった。二年間の成果は目下成稿中で、今年度中に編集される予定であるが、本年度の東アジア漢文文化を論ずる学会(フランス、H31年度S-2)を経て、4年度目には中世天台学僧慈円を主題とする学会において、更に求心的かつ集中的に議論され、それらの成果はより総合的な「聖語」たる宗教テキスト文化遺産の言語論から文明論にわたる「全書」的記述として、世界の学术界に提供されることになる。

・R-3「像内納入宗教文化遺産の比較研究」は、ハーバード美術館蔵聖徳太子二歳像(1292)の共同調査に端を発し、その像内納入品が、中世宗教世界を包蔵する如き宗教テキストのアーカイヴとして極めて多様な様相を呈していることから、その解読分析を起点として、日本の仏像に限らず、韓国仏像の腹蔵品、中国の仏像や民間神像に見出される歴大な納入品とテキストの研究と呼応して、東アジア世界全域にわたる宗教文化遺産の一領域として認識されることとなった。本研究は、像内納入品を対象に、仏教史、美術史から各種納入物の物質科学分析や工芸繊維まで各種分野を横断してその成果を総合する必要がある、まさしく分野融合的先端研究であり、これをテキスト学が統合する点において、本事業の研究課題におけるパイロット的な役割を果たすものと位置付けられる。二年間の成果は、19年5月にハーバード美術館で開催

された聖徳太子二歳像の納入品全点を展示する展覧会と公開学術セミナー(H31年度 S-1)において共同で報告され、そこに名古屋大学 GHT が作成した像内納入テキスト資料集(参考資料参照)が提供された。これにより研究が大きく進展することは疑いなく、更にこれを元に研究を深め、本事業期間内に日米双方で報告書を共同製作することが合意された。新たな目標が設定されたことにより、この共同研究が一層の広がりとなり達成を期待できることになった。

・以上のように、主に日本宗教が形成・伝承した宗教文化遺産を対象に、その普遍性を、人文学が積み上げてきた伝統的かつ革新的なテキスト学の方法と理論を媒ちとして探求する試みを、多元的な境界の上にとらえる文化論の水準、宗教的言語文字としての聖語テキストの言語論の水準、また聖像内部に構築され物質・身体性を帯びた諸位相の宗教テキストの統合的研究を通じて、それらが生成し伝承されてきた歴史文化の文脈が、なお一端ではあるが、次第に明らかになりつつある。これらが、それぞれの研究水準の範囲で完結するのではなく、相互に交流し成果を共有しつつ議論する段階に至れば、これまでにない新たな宗教文化遺産として人類宗教文化の所産を展望する地平が拓けることだろう。現在、その道筋が望まれるまでの成果に達していると考えている。

### ○研究交流活動の成果から発生した波及効果

日本および世界の宗教文化遺産を対象として、その多様なパースペクティブと豊かな歴史文化的コンテクストを国際的な研究交流と連携のもとにテキスト学によって探求・解釈しようとする本事業の活動は、関連諸学界をはじめ各分野にその成果や影響を及ぼしている。その一端は、日本文学の関連学会のひとつである説話文学学会の大会シンポジウムや例会などに「宗教文化遺産」をテーマに設定し、また共同研究の研究課題やそこでの成果が扱われて紹介・検討されたことである。特に19年6月の説話文学学会大会では「律をめぐる宗教的環境と説話文学との架橋」と題して、中世泉涌寺を取り上げて、R-3 で扱ったハーバード美術館蔵太子像の像内に在った律の談義聞書を取り上げてその宗教的環境を問うものであった。この他にも同像内納入品は、常識的な中世仏教の認識を大きく改めるような宗教テキストに満ちている。

また、研究代表者は、自身が研究代表者をつとめていた科学研究費助成事業・基盤研究(S)を活用し、人間文化研究機構(歴博、国文学研究資料館、日文研)と連携し、更に神奈川県立歴史博物館、同金沢文庫、國學院大學神道博物館と協同して連携展覧会「列島の祈り」(総合タイトル)を18年9月15日～19年1月14日にかけて連続して開催したが、その企画・立案には本事業の国際共同研究の成果が展示解説・図録作成を含めて大きく生かされ、また拠点研究者をはじめ参加研究者も多くその展示を観覧し図録を利用した。展示やそれに伴う講演等の成果は、本事業のセミナー等に反映し参照された。また、本事業と連携・連動するもうひとつの国際研究交流活動である、同時期に採択されたJSPSグローバル展開プログラム「絵ものがたりメディア文化遺産の国際共同研究による探求と発信」が、二年間にわたり併行して推進されたことにより、同じく拠点として米ハーバード大学、仏イナルコ、独ハイデルベルク大学等の美術研究者と研究グループが、宗教文化遺産とも重なり密接な関係にある絵巻・絵本各その他の図像と視聴覚文化について共同研究とその対象となった資料の遺産化に従事したことは、本事業の大きな波及効果であり、またその成果も本事業に還元され、莫大な相乗効果を生んでいる。

以上、それらの成果を踏まえて、代表者は本事業に参加、協力、連携をいただいた諸研究機関とその研究者に呼びかけ、新学術領域「宗教文化遺産テキスト学」創成の提案を行い、その実現のために国内外の学術共同体の構築を開始している。

### ○若手研究者育成への貢献

・若手研究者が身につけるべき能力・資質等の向上に資する育成プログラムの実施及びその効果

本事業の大きな特色として、毎年、名古屋大学 CHT は南山大学宗教文化研究所と共同で「日本宗教文化セミナー」(H29 年度 S-3、H30 年度 S-7)を開催し、本事業の国内でのセミナーの一つに位置付けている。このセミナーは、日本の宗教文化を学び、研究する海外の大学院生および博士論文執筆中の若手研究者に呼びかけ、公募により応募し選ばれた報告者を名古屋に招聘し、全て日本語により口頭発表と討議を行うものである。このセミナーには代表者をはじめ CHT と宗教文化研究所のスタッフだけでなく、発表者の報告内容にふさわしい日本宗教や宗教学、文化学の第一線研究者を招請し、全発表者に対するディスカッションの役割を依頼している。発表は 45 分、ディスカッションとの質疑とコメントが 45 分、合せて一人 90 分という破格の充実した時間配分で、しかも日本の学界でなければ実現できない高水準のディスカッションを提供している。これは結果的に、参加した学生にとって自己の博士論文完成のために極めて有益かつ有効な指導を受けることになり、かつ、参加者や来聴する日本の大学院生・研究者とのプログラム前後の意見・情報交換と交流の絶好の機会をも提供している。更に二日間のセミナーの後には、愛知周辺の寺社・祭礼等の見学を中心とするエクスカージョンが用意されており、初年度は足助・猿投神社、二年度は新野の雪祭りであった。二回の実施により既に 11 名の参加者がこの得がたい経験を享受した。参加者の出身大学はアメリカ、イギリス、ドイツ、オーストラリア等であるが、その多くは博士論文を完成しており、今後着実にこのセミナーが継続すれば若手日本宗教研究者の登竜門となることが期待される。また、この他の共同研究やセミナーにおいても必ず若手研究者を主体的に参画・参加させるよう、相手側拠点を含めた双方が配慮しており、特に大規模な国際研究集会に当たっては、若手研究者によるセッション(コロンビア、H30 年度 S-8)や特別部会(京都、H30 年度 S-2)を設けて、そこに臨む中堅・ベテランとの質疑やコメントが得られるよう配慮している。

・次世代の中核を担う若手研究者が、交流相手国との研究ネットワークを構築したか

代表者と共にコロンビア大学(R-1)やハーバード大学(R-3)との共同研究を担当し、また CHT のアーカイヴス部門を代表者の後任として担う近本謙介教授は、本事業をはじめ、宗教文化遺産テキスト学の将来を担う若手研究者の中心として、自身が率先して相手交流国である欧米諸国の日本研究者と研究交流を行っている。特に 16 年にはハーバード大学イエンチン研究所のヴィジティング・スカラーに採用され、一年間の研究滞在を経て、その間に培った若手研究者との密接な学問上の交流と信頼関係は、本事業の円滑な遂行にあたって大きな財産である。特に R-3 の共同研究は、今後の展開も含め大いに期待される場所である。また、コロンビア大学の次代を担う中心となるマイケル・コモ教授とも交流を深めており、今後、米国の両拠点大学との研究交流の中核となることは確実であろう。更に、ドイツではハンブルク大学の国際写本学研究所の、や

日本学術振興会研究拠点形成事業 ● Core-to-Core Program  
テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築





はり次世代を担う中核となるシュテファン・デル教授とも緊密な関係を築き、あらたな共同研究 R-4 を発足させた。その基盤としては、名古屋大学の内部競争資金である最先端国際研究ユニットに、近本教授が研究代表者として採択されており、これにデル教授も参加するなど、研究チームとして本事業の発展的推進に大きな力を発揮することが期されている。一方、同教授は、別途採択された JSPS 頭脳循環プログラムの運営責任者でもあり(2019 年度まで)、このプログラムによって、前述のように名古屋大学 GHT に共同研究員として所属する PD など若手研究者が、長期間にわたり拠点協力機関であるストラスブール大学へ派遣されている。そのうち一名は、博士論文を元に単著を刊行した(H29 年度)が、これにより中村元東方研究学術賞と説話文学会賞を受賞しており、本事業によるセミナーに報告者として参加したことを契機にロンドン大学に招聘されセミナーを行うなど、あらたな研究ネットワークを構築している。彼らをはじめ、本事業の共同研究やセミナーに進んで参加する若手研究者たちが、更に次の世代を担うことになる。特にコロンビア大学との R-1 およびその成果を結集した S-8 に参加した多くの若手研究者たちの活躍の場を、いかに広げるかに未来の人文学の発展がかかっていると思われる。